関西帰国生親の会かけはし会報

Vol.50　　関西帰国生親の会かけはし　https://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/

1984 年、海外生活を終えて子どもの進学問題に直面した母親が集まり、『帰国生への学校案内《関西》』を作り始めました。帰国児童生徒が増え、学校でのいじめが社会問題化した頃です。数少ない受け入れ校を訪ねて紹介する取り組みは、子どもたちの現状を学校や社会に伝えることでもあり、帰国生に対する理解や受け入れ体制の拡充に繋がったのではないでしょうか。かけはしは多くのご助力を得て、会報作成、セミナーやレッツトークなどの開催、帰国生教育関係の会合参加、教育相談や渡航前相談、HP や Instagram での発信など活動を広げてきました。「私たちの経験が誰かのお役に立てたらうれしい」との思いは今も同じです。

本会報も 50 号となり、かけはし 40 周年とも関連づけて「帰国生と共に 40 年」をテーマとしました。帰国生を支えてこられた先生方の座談会、ご祝辞、会の教育相談の変遷をご紹介します。リポートでは異なる年代の帰国生の経験を聞きました。毎回ご好評をいただく異文化体験談や海外校のようすもお届けします。昨年度から HP に掲載されている学校訪問記のダイジェスト版もぜひご一読ください。

時代とともに帰国生をとりまく環境も変化してきました。グローバル、多様性という単語が飛び交い、一見帰国生は優位だと思われがちですが、依然として周囲の理解や学校選択には壁があることも事実です。帰国生たちが伸びやかに個性を活かし、胸を張って歩んでいける世の中であってほしいものです。

関西帰国生親の会かけはし

目　次

＊　ご挨拶　1

＊　特集　－ 帰国生と共に 40 年 －

かけはし発足 40 年、かけはし会報 50 号記念座談会　「帰国生教育の移り変わり」　2

三田学園中学校・高等学校　校長　眞砂　和典

大阪 YMCA インターナショナルスクール　小路　清一

「[祝]　かけはし 40 周年」　外務省大臣官房人事課子女教育相談室　室長　小澤　一郎　6

(公財)海外子女教育振興財団　教育アドバイザー　菅原　光章

＊　かけはしリポート　(第 28 回)「帰国生、この 40 年」　7

＊　異文化でドッキリ！　＜パーティー編＞　10

＊　海外の学校を紹介します　「International School of Amsterdam」　澤本　美樂　12

＊　教育相談　今むかし　13

＊　学校訪問記　14

高槻中学校・高等学校　奈良県立国際中学校・高等学校　啓明学院中学校・高等学校

大阪国際中学校高等学校　立命館宇治中学校・高等学校

＊「関西帰国生親の会かけはし」と他の団体とのつながり・「レッツトーク 2023 秋」実施報告　18

会員のつぶやき・編集後記

＊　かけはし情報発信・ご賛助くださっているみなさま　20

（敬称略）

かけはし発足 40 年、かけはし会報 50 号記念座談会

「帰国生教育の移り変わり」

かけはしは発足して今年で 40 年、会報は 50 号になります。この記念として企画したオンライン座談会に、帰国生を長く見守ってこられた眞砂先生、小路先生にご参加いただきました。お忙しい中、両先生にご参加いただけたことを大変うれしく思います。

眞砂　和典　先生

英国暁星国際学園、帝京ロンドン学園で教鞭を執る。帰国後、関西学院千里国際中・高で教員を勤め最後の 7 年間は校長。
その後岡山理科大学のグローバルセンター長として IB の教員養成コースを担当。2022 年から三田学園中・高の学校長。

小路　清一　先生

大学卒業後から大阪 YMCA 国際専門学校国際高等課程国際学科に勤務。
英語教員を務め、現在は大阪 YMCA インターナショナルスクールで IB の PYP～DP(幼稚園年少から高 3)のプログラムマネジメントを担当。「帰国子女教育を考える会」では事務局を担う。

かけはし：本日は「帰国生教育の移り変わり」をテーマにしています。昔の帰国生、教育事情についてお話を伺えますか。（敬称略）

眞砂：私が帰国生と関わるようになったのは千里国際に来た時からですので 31 年くらい前からですね。千里国際は、半分は帰国生、半分は日本の小学校から来た生徒で、あとは併設している大阪インターナショナルという外国人のための学校なので、ちょうど 1/3 ずつです。そこで初めて帰国生と接するようになりました。帰国生は衝撃的でしたね。自由な感じでとても羨ましく思いました。発想が国際的というか、豊かで素晴らしくて。それまでは帰国生を日本に同化させようという考えの学校が多かったと思いますが、千里国際という学校が、「帰国生のよさをいかそう、帰国生と日本の一般生徒の間で化学変化を起こさせよう」そんな多様性の中で教育をするという方針でしたので、帰国生を伸ばし、今までやってきた勉強とつながりができるようなシステムを作っていました。そして、おそらく文部科学省は、日本の教育である「一方的に教え込む教育」はもう続けていけないことがわかっていたので、帰国生の自由な発想で動けるようなものをどんどん取り入れようとしていたと思います。

小路：YMCA の国際専門学校の国際高等課程国際学科は、帰国生が 1/3、外国籍が 1/3、英語に関心のある日本人の生徒を 1/3、という思いで作られましたが、蓋を開けてみれば外国籍の子はそんなにいなくて帰国生がたくさんいました。長い期間なのでいろいろと変遷はありますが、手強い問題を抱えていたり、本人の悩みが深かったりして、日本のシステムに戻った後、しんどくなったというケースが随分多かったように思います。しかし、おそらくは社会のありよう、変遷があるのだと思いますが、現在の生徒たちを見ると、極端なケースは減ってきていて、「帰国生です！」と胸を張って言う生徒が増えているかなと思います。以前は、それがなかなか言えなくて鬱屈していた生徒が多かったという印象を持っています。

かけはし：手強い問題、と言われましたが具体的にはどういうことでしょうか。

小路：友人関係が思うようにいかなかったり、アイデンティティの問題で自分のことがわからなくなること

や、日本語が思うように使えないとか書けない等の学業面で問題が出たりしたケースがありました。現状でもそのような悩みを抱えている帰国生もいるとは思いますが、ご本人や周囲の受け止め方が以前よりも和らいでいる部分があるのではないかなと思います。

眞砂：今は帰国生との繋がりがないのですが、千里国際で話を聞くと、帰国生が変わったというよりも日本の教育が変わったと思うんですね。それは帰国生が変えてくれたと感謝しています。そして、いろいろな学校が増えています。インターナショナルスクールも増えています。その子その子の適性に合わせて学校を選ぶことができるようになってきているのではないでしょうか。昔は、帰国生受け入れ校と言っても名前だけで、生徒を増やしたいから帰国生を受け入れている学校が多かった。しかし、今は個性を出している学校があって、帰国生受け入れ校でなくても帰国生が活躍できそうな学校が増えてきたのではないかと、私は楽観的に思っています。

かけはし：社会人になっている卒業生のお話を聞かれたことがありますか。

小路：卒業生の職業については、ごく一般的に日本の企業にオフィスワーカーとしてそのまま勤めるタイプは多くはない気がします。起業していたり英語の先生になったり、海外で仕事をしていたり、そういった話は結構聞きます。そもそもですが、国際専門学校の国際高等課程を卒業された人はどちらかというと普通の学校は面白くないとか合わないとか、別のものを求めてきているところがあるからなのかもしれませんが。

眞砂：千里国際の卒業生には、帰国生とそうでない一般の生徒がいるんですけれども、誰が帰国生だったのかはわからないくらいみんながユニークです。以前岡山の大学で IB 教員養成をやっていた時、一緒に仕事をしていた人が帰国生でした。そのまま大学の教員を続ければいいのに、「私はやっぱりカウンセラーになりたい」と、今はシンガポールの IB 校でカウンセラーになっています。自分の仕事を人からどうみられるかではなくて、やりたいことをやっていくという感じの人でした。研究者に向いていて、探究して突き詰めていくということも帰国生が持っているいいところなんじゃないかと思います。

かけはし：以前は大変だったけれど、今は情報収集しやすくなった、帰国後の学校選択もしやすくなったという話を聞きますが、インターネットの普及で昔と今とではどのような違いがあるとお考えになりますか。

小路：海外に行かれている期間でも日本の情報、特に学校だけではなく、知りたい時にいろんなことを知ることができるようになりました。SNS でも、どこにいても日本と普通に繋がっていられる。そういう意味では海外にいる子どもたちの日本との関係の取り結び方、アイデンティティに絡むと思うんですけど、その辺は違っているんじゃないかなと思います。

かけはし：インターネットがなかった時に帰国生はどうやって入学してきていたのでしょうか。

小路：口コミというのが私どものところでは大きかったのかな。学校としては時々新聞や雑誌に広告を出したりしていたのですが、その効果があったのかどうかはよくわかりません。かけはしさんからの発信や会報も大きかったと思います。

眞砂：海外に住んでいらっしゃる方は相当前からインターネット等を使ってないと不便だったでしょうね。私が千里国際で校長になった 2009 年頃から、海外の学校説明会に行っていました。

かけはし：今でも千里国際の先生方は海外へ学校説明会に行かれているのですか。

眞砂：少なくなったでしょうね。今はインターネットで説明できますし、入試はオンラインでもやっているので、帰国生がそのためにわざわざ帰国する必要はなくなったと言っていました。

小路：私どものインターナショナルスクールでは随分前からインターネットでの入試をやっていますが、国際高等課程ではやっていないと思います。受験生にはいまだに来ていただいてお話させてもらっています。

かけはし：保護者の方とのやり取りも変わりましたか。

小路：インターネットがないと全然ダメです。今は電話応対もほとんどできないようにしています。お問い合わせの段階からホームページのアドミッションに入っていただいて、最初だけ少し入力していただいた後、さらに進んでいただくようになっています。

眞砂：三田学園ではまだ 20 ページくらいのパンフレットはありますが、千里国際ではもう部厚いパンフレットはやめて、ホームページだけで十分足りるかなという感じです。インターネットがきちんと使えて、いいホームページを作っている学校が帰国生とマッチするような学校だと思います。

小路：私どもも学校のパンフレットがあるにはありますが、ほとんどお渡ししていません。インターネットの方が新しい情報が載っているということもありますので基本ホームページに掲載させていただいています。

かけはし：IB に関心を持っている帰国生は多いと思いますが、いかがでしょうか。

眞砂：千里国際では大阪インターナショナルスクールが 1991 年から IB をやっていたので、IB としては老舗になります。IB で学んできた人が帰国後も続けたいのはその通りだと思います。日本の授業よりも IB の授業の方が自分には合っていると感じる帰国生は多いんじゃないかな。また、このごろは日本語 IB ができていますから、英語がそこまでネイティブに近くなくても IB ができる学校もあります。

かけはし：どんな帰国生が IB 校を目指していると思われますか。

眞砂：授業の仕方が IB に似ている学校は欧米系に多いと思います。アジアは結構受験でガリガリやりますが、インター校に通っていれば IB は欧米系の勉強なので問題ありません。私の感触ではほとんどの帰国生は IB はやればできると思います。むしろ日本式の先生の板書を写すような授業は相当きついでしょう。

小路：最近の日本の動きとして、大学入試の中身を変えていきたいという文科省の考えがあって、いい意味で徐々にインパクトが強くなってきている。子どものどういう力をみるべきか、どう育てるべきか、ということが、IB の理念とほぼ重なるような新学力観になっていると思います。そういう意味で IB がいい影響を与えてくれている。きっと帰国生のみなさん、外国籍の生徒、多様な生徒たちのありようが国の教育方針なりいろいろなことを動かしているんじゃないかなと思います。

眞砂：大学入試も中身がだいぶ変わってきているので、帰国生が受験しやすくなっている気がします。昔みたいにただ暗記力を問われるのではなく、資料を読み込んでそこから自分で考えて、解くみたいな出題が増えています。

かけはし：今は一般入試よりも推薦入試や総合型選抜(AO 入試)が増えていると思いますが、帰国生はどういうタイプで大学進学していく人が多いのでしょうか。

小路：一般的に言って AO 入試は非常に大きな救いだったんじゃないでしょうか。AO 入試は、IB の資格で受けられるというところも増えています。帰国生であることをいかせるということで言うと、やはり AO 入試や推薦入試はメリットが大きいんじゃないでしょうかね。

眞砂：全体として一般入試が去年くらいから 50%を切っているんですよね。特に東北大学は新しい大学を作るという計画があって、その入試は総合型選抜にウェイトが移るようです。

かけはし：今後の帰国生教育の展望についてお聞かせください。

眞砂：帰国生の多様性をいかせるような学校が日本に増えてきています。学校のホームページをしっかりみると、帰国生受け入れ校でなくても、この学校、すごくいい勉強ができる、有意義な学校生活が送れそうだ、と感じられる学校があると思うんです。そういうところを探してもらうと、日本でも自分に合ういい学校がみつかると思います。

小路：その通りだと思います。加えて言うと、世の中全体が変わってきているので、もっともっと自分らしくあっていいと思う。自分を出し過ぎるといじめにあうとか、苦労するケースもあるとは思いますが、長い目でみると、少しユニークな体験・経験年数を持っていることは大きなメリットだと思います。もう一つ言うと海外にいる時、どういうありようでいるのか、ということもだいじだと思います。どこにいても、あくまで自分らしくいられれば、帰国後もやりやすくなったり、自分が出せたりするんじゃないかなと思います。将来は自分の力を発揮してほしいし、経験をどんどんいかしてほしいです。

かけはし：日本語の力はどの程度つけていればいいと思いますか。英語だけできればいいと思われますか。
眞砂：先ほども言ったように、帰国生に合った学校を選べばいいと思いますのであまり無理して日本語や、苦手なものばかりに時間を使う必要はないと思います。大学入試も日本語が大変ならば、一般入試以外で自分に合う入試を探すとか、海外に目を向けるとか、無理しなくてもいいんじゃないかと思います。将来のことを考えて日本語力はあった方がいいけれど、選択肢は広く世界に求められる時代になりました。
小路：違うことを言った方がいいのでしょうが、まったく同じです。仕事のことを考えても、最近企業によっては外国籍の人の採用も増えているようですし、何をいかせるかっていうことで言うといろいろあると思いますので、そこまで大変な思いをしなくてもいいのではないかと思います。

かけはし：ありがとうございました。では、かけはし会員からなにか質問があればお願いします。
かけはし会員 A：帰国後日本の学校に適応できずに不登校になった生徒も多くいると思うのですが、上手くいかなかったり、メンタルヘルスが落ちてしまったりした場合、親はどのようにすればいいでしょうか。
眞砂：日本の学校は多様化しています。オンラインで学習できる学校もあるじゃないですか。学校に行きにくくてもネットの中で活躍する子もいます。学校に行かなきゃいけないと思うとプレッシャーがかかるので、最初はその子に合った学校を探すことがだいじではないかと思います。この頃は「国内留学」と言って過疎地や島で、ユニークなことをやっている学校もありますからそこでハッピーになれる帰国生もいるんじゃないかな。
小路：通信制の学校ではいろいろトライされているところもあると思います。YMCA では通信制もあったりします。また、全日制でも一条校の中での取り組みもあると思います。専修学校の高等課程の中でもかなり不登校の生徒さんのヘルプになるようなことをされているところもあります。
かけはし会員 B：今後特に帰国生教育をしなくても日本の教育が変わっていくのなら、海外から帰ってきてもあまり問題なく学校に行かれるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。
眞砂：私はそう思っています。自分に合った学校さえみつかれば別に帰国生のための教育なんていらないと思います。手前みそになりますが千里国際ではいつ帰ってきてもその子のやってきた勉強につながるようなシステムを作っていますし、そういうことを活用すれば、帰国生は一人ひとり違いますから、帰国生というくくりでの教育はいらないと思っています。日本の学校はもっと多様化してほしいし、もっといろんなことをやってほしいですが、そういうふうになりつつあると思います。
小路：その通りですが、現状はどうかというと、いろんな学校の取り組みは出てきていますし制度的にもあると思いますが、十分かというとまだどうなのかな。仮にラストワンマイルになっても最後のワンマイルはなかなか大変じゃないですか。まだそういうことはあるんじゃないかとも思います。

大変参考になるお話をお聞かせいただけて感謝いたします。日本が帰国生にとって以前より戻りやすい社会になってきているようで、少し安心いたしました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

［祝］かけはし40周年

長年にわたって帰国生教育にかかわりをもたれ、かけはしの活動にも深くお心を寄せてくださり、ご理解やご助力を賜ってきた先生方からかけはし40 周年にお祝いのお言葉をちょうだいしました。

会報 44 号から

外務省大臣官房人事課子女教育相談室
室長　小澤 一郎 先生

海の向こうに夢を見る～海外子女に寄り添って～

貴会が関西地区を中心に、海外赴任者に対して種々の支援活動を続けてこられたことに敬意を表します。私はその活動に一部協力させていただきました。かけはしセミナー(2012 年)において「帰国生へのサポート～親は何をなすべきか～」というテーマで、海外子女の心情と親のサポートのあり方についてお話いたしました。また、コロナ禍にあって急速に高まった「秋入学」について会報 Vol.44 に寄稿いたしました。いずれも私の長年の帰国子女教育の経験と、現職での教育相談の体験を通してメッセージをお届けしたものです。

人はどこにいても夢を見ます。その場に立って、自分の未来を見つめて、どう生きていくか。その場所がたとえ海を越えたところでも―そんな夢を追い続ける海外子女に寄り添って、共に考え、助言をする、それがボランティアグループ「関西帰国生親の会かけはし」の働き。これからも、未来に向けて飛び立つ若者たちと家族のために心強いサポート役を担ってくださることでしょう。貴会の創立 40 周年に心からお祝いを申し上げます。

会報 36 号から

(公財)海外子女教育振興財団
教育アドバイザー　菅原 光章 先生

かけはし 40 周年に寄せて

私が台湾の台北日本人学校に赴任したのが今から 41 年前。学期毎に多くの子どもたちが、日本からやってきたり帰国したりしていました。どの子も新たな学校生活を前にして様々な不安を抱えていたと思います。もちろん保護者の方たちも。

そういった子どもたちや保護者の方たちにとって「かけはし」の存在はとても心強いものだったことでしょう。きっと関西に帰国した私の教え子たちも「かけはし」のお世話になったはずです。改めてお礼申し上げます。

コロナ禍をはさんで日本、そして世界は大きく変化しています。海外で貴重な学びや経験をした子どもたちは今後、大きな役割を果たしていくに違いありません。財団と「かけはし」、共にこれからの世界を作っていく子どもたちを支援していきましょう。「かけはし 40 周年」、心よりお祝い申し上げます。

かけはしリポート（第 28 回）

帰国生、この 40 年

・はじめに

帰国生教育について論じられるようになったのは 1970 年代からでしょうか。当時は、現在のような情報化社会とはかけ離れていて、帰国した生徒側も受け入れる学校側も手探り状態だったことでしょう。それから半世紀、帰国生も日本の教育も大きく変化をしています。今回のリポートでは 1980 年代の帰国生、2000 年代の帰国生、2020 年代の帰国生に同じ質問をしてそれぞれの思いを聞いてみることにしました。大変貴重な意見をいただきましたので、ぜひご一読ください。回答は原文のままです。

・アンケート調査について

① 目的：年代別帰国生の意識調査

② 実施期間：2024 年 3 月

③ 対象の帰国生：［1980 年代］A さん(韓国滞在 4 年、日本人学校中等部、インター校)
［2000 年代］B さん(ベトナム滞在 4 年半、日本人学校、サウジアラビア滞在 2 年、インター校)
C さん(アメリカ滞在 2 年 8 カ月) D さん(ベルギー滞在 14 年) ［2020 年代］E さん(ドイツ滞在 4 年)

④ 質問内容：1 現地の学校の思い出 2 日本での学校選択や受験についての情報取得方法
3 帰国後の進路 4 かつての海外生活が現在自分にとってどのような影響を与えているか

・結果

1 現地の学校の思い出(敬称略)

A（ソウル日本人学校） 中学 3 年秋に渡航。学年は 1 クラスのみ 17 名、当時はインターや現地校卒業生の大学の帰国子女受け入れが殆どなかったため、現地で高校進学しそのまま在留する生徒は皆無であり、高校受験のタイミングで全ての中 3 生は帰国していた。12 月には自分以外全員が受験のために帰国して、先生と 1 対 1 の授業となり家庭教師状態であった。学校側も過去に自身のようなケースに対応したことがなく、手探り状態であった。生徒の帰国タイミングに合わせるために、授業カリキュラムは 12 月までに教科書の全てを学習完了するようになっており、途中転入の自分はついていけず、渡航してすぐの試験で人生初めての 0 点を取り大変なショックを受けたことが、大人になった今でも強烈に印象に残っている。
（インター校） 英語は大好きで得意な科目であったが、教科書で読み書きするだけのレベルでいきなり全て英語の世界に入り込むのはとても苦しく、最初の 3 ヶ月は泣きながら通学していた。受け入れてくれたインター側も、過去に「英語のわからない生徒」の在校経験はなく、入学前に両親が熱心に掛け合ってくれた結果、ESL(English as a second language)のクラスを設けてもらい、他の必須科目以外に英語習得のためだけの授業を受けることができ 2 年程でアメリカの大学進学に必要な英語力レベルへ到達することができた。当時の日本の普通校ではなかった、コンピュータ・タイピング・英文速記などの授業があり驚いた。これが後に大変役立った。外国人視点での「日本人」というものを初めて体感。SONY を抱えてちょんまげで馬に乗る生活をするのが日本人だと思われているとは、その時まで知る由もなく衝撃的であった。

B（ベトナム日本人学校）小 1 のクラスメイト 7 人に対して、30 人規模の教室でとても広かったので、先生がゴザを敷いて和室風のエリアやダンボールハウスを作ってくれてその中で遊んでいたこと。
（サウジアラビアインター校）家で勉強していたら、仕事から帰ってきた父が「おれは応援団だからな、頑張れよ」と言うことが何度かあった。それなら勉強を手伝ってもらおうと思いつき解答集のない物理の 4 択問題の答え合わせをお願いした。電子辞書を使って解読してなんとか丸つけしようとしている父の姿を見て申し訳なく思い、それっきり手伝いを頼むことはやめた。学校にアバヤ(黒い上着)を羽織って通って

いたが、その姿はまるで魔法使いがマントをはためかせて歩いているようで、「私は魔法学校に通っているんだ」と思うことがあった。

C　現地ハイスクールで水泳部に所属。長年のブランクから最初はまともに泳げなかったが、2 年目には Varsity(レギュラー)入りできたこと。

D　当たり前のように様々な言語で色々な国出身の友人と会話をしていたこと。

E　11 年生の終わりからコロナが流行し友人とも会えずに大変だったが、卒業式だけは対面で行えた事が思い出深い。

2　日本での学校選択や受験についての情報取得方法

A　父親の会社の海外渡航サポート部門が親身になってサポートしてくれ、情報を逐一送ってくださった。当時はインターネットで調べたり連絡したりという手段がまだなかったため、常に早め早めに先を読んで情報収集しなければならず、両親はとても大変な様子であった。

B　現地にて学校の HP を検索・問い合わせをし、休暇で帰国した折に学校訪問をしました。

C　急に帰国が決まり、かけはしの学校案内を見て、アメリカから父がいくつかの学校に電話で問い合わせた。高校 2 年に進級する春の帰国だったが、学年を繰り下げて高校 1 年生から 3 年間の高校生活を過ごしたかったので、それができる学校を探した。帰国が決まる前の夏の一時帰国で、学校説明会に参加していたことも学校選択の参考になった。

D　元々母親が帰国生の大学受験に詳しく、色々話を聞いていました。また、同じ高校に通っていた日本人の先輩が日本の大学の英語での学位取得プログラムに入学したため、私も同様の進路を目指し先輩に話を聞いたり、インターネットで情報収集したりしました。

E　自分でインターネットで調べた。

3　帰国後の進路

A　それまで帰国子女枠は上智大の比較文化、ICU しかなかったが、ちょうどあちらこちらに受け入れ枠が広がり始めた年の受験であったため、自身の希望とする学校を選択することができた。日本人学校を 3 月に卒業後、インター9 年生に編入。インター卒業後日本へ帰国。6 月に卒業であったため、1 年遅れて大学受験。帰国子女枠受験対策講座を実施している予備校(父の会社紹介)で、日本語での作文を中心とした勉強をした。習得した英語を活かせる学校であることを鑑みて短大受験を選択。当時は帰国子女＝英語圏からの帰国が大前提で、アジア圏からの帰国生は敬遠されていた。自分でも英語圏から帰国した人とは英語力に雲泥の差があると感じていたが、英語力だけでないアジア圏だからこそ経験できたことを大切にこの先活かして欲しいと言ってくれた学校に進学を決めた。夢であった客室乗務員となるために航空会社に入社。現在に至る。

B　大学で国際開発や異文化理解、経営のことを学んだ後、メーカー総合職のキャリアを歩んでいる。

C　日本の国立高校→私立大学→自動車メーカー

D　英語での学位取得プログラムに入学しましたが、在学中に医学部に編入することができ、そのまま医学部を卒業、現在は医師として働いています。

E　国際バカロレアを使って、日本の大学に入学。

4　かつての海外生活が現在自分にとってどのような影響を与えているか

A　今ほど情報収集が簡単に出来ず、また情勢の不安定な国に在留し、全てが不安な生活の中での思春期であったが、家族との繋がりがとても強まり、家族の大切さというものが自身にしっかりと根付いた。英語力だけでなく、色々な異文化を体験していることで多角的に物を見たり判断したりすることができるようになった。戒厳令があったり、日本人というだけで石を投げられたり、タクシー乗車拒否されたり

という混沌とした時代で、「普通」と思っていた「日本人」や「日本」について深く考えるようになった。また日本の良さというものを認識できた。それらは社会人となった今、職務に大いに活かされている。正直当時はなんでこんな目に遭うのかと悲観的であったが、勉強だけでなく日々の暮らしの体験が、きっと将来役に立つ日が来る、自分を輝かせることができると帰国生の後輩の皆さんに伝えたい。

B　海外に出れば国籍を持つ国とは異なることで法的な立場が弱く、マイノリティになることを子供ながらに強く感じることの多い国にいたので、個を主張するというよりも周りをよく見て、それに合わせて過ごすことがうまくなったと思う(郷に入れば郷に従え)。一般的な日本人よりも自分を強く見せるようになったと思う。自分が弱く見えたら危ないという意識を海外にいた時に持っていたことに由来すると思う。良くも悪くも一般的な日本人と比べて「何事にも意見を持っている」と仕事でよく言われる。英語のライティングではロジック(論理的思考)が大事だとよく言われるが、それに早くから慣れ親しんだお陰でそのような思考は強くなったと思う。英語のライティングでよくコンプレインレターを書くことがあったが、その時の先生の教え方なのか、欧米圏では一般的なことなのかわからないが、必ず受けたサービスがどれだけ良かったかを褒め讃えてから苦情を書くよう言われていた。そのせいかわからないが、まずは良いところを言ってから言いにくいことを言うようになったと思う。競争社会というよりも個々人が自分なりにやりたければがんばればいい、という文化で育ったので、競争が苦手だと思うし、みんな違ってそれぞれにいい、という考えは強い方かもしれない。

C　10 代中盤の多感な時期に国外へ出ることで、日本人というアイデンティティと深く向き合うことができた。また、言語のみならず、価値観が大きく違う環境の中であらゆる努力を通じて生き抜いたことは大きな自信に繋がり、今なお拠り所になっている。

D　一つの価値観にとらわれず、周囲の人たちと積極的に意見を交わすことができているのは、海外でディベートの大切さを学んだからだと思います。

E　日本で外国人に道を聞かれたり話しかけられても抵抗なく話せる。学習面以外では、日本国外に住むことで様々な人に出会い、文化を知り、成長するができた。

・まとめ

それぞれの回答には帰国生たちの思いが凝縮されています。子ども自身とそれを見守る親の奮闘、学校の協力、そして時代背景の変遷が伝わってきます。言語も習慣も違う現地の学校での言葉にならない苦労は、今もむかしも変わりません。特に、日本についてまだ現地で正しく認識されていなかった 40 年前には、今では考えられないようなことが日常的に起こり、大変な思いをされたとのことで、頭が下がります。

学校情報の取得については、インターネットの普及で劇的な変化があり、かつては親戚や知人、会社の担当者など多くの人の手を介してなんとか細々と得ていた情報も、現在では帰国生が自身で即時に入手することができます。有用な情報が増えることで、可能性は大きく広がり、自分の希望に一番あった学校を探すこともできるようになりました。回答者の帰国後の進路は様々ですが、いつの時代の帰国生も、10 代での海外生活は、多様な価値観を生み自己の成長を促したと前向きに捉えていました。本人の多大な努力はもちろんのこと、彼らを支える家族や先生方の尽力もあってこそ実を結んだことだと思われます。

1980 年代の帰国生が語っていました。**「私と家族が迷いながら辿った道なき道が今ではそのまま根付き、日本人子女の進学ルートとして生かされているそうです。パイオニアになれたかな。私の苦しんで歩んだ道もちょっとは役に立っているのかな」。**かつて、現地での教育や帰国後の受け入れには多くの問題がありました。これらの問題を重視したことから始まった帰国生教育。数多くの子どもたちの足跡と共に帰国生教育が在るといえるのではないでしょうか。

かけはしも今年で 40 周年です。これからもみなさまのお役に立つことができれば幸いです。

異文化でドッキリ！＜パーティー編＞

毎回驚きいっぱいの異文化でどっきり。今回は記念号ということでパーティーエピソードです。
パーティー文化が盛んな海外ですが、お国柄の違いをお楽しみください！

息子のスイムチームの更新日の前夜、いきなりチームメイトのお母さんから、「早くプールサイドに申し込みに来て」と電話が。何事かと思って出かけたら、コーチや親たちが飲めや歌え、踊れやと盛り上がっていた。パーティーは一晩中続き、明け方疲れ果てた私はデッキチェアで眠ってしまった。人生初の野宿！まぁ夏だからよかったけど。そのままみんなで更新申し込みをして解散。チームの親たちのノリの良さには恐れ入った。（アメリカ）

インター校の幼稚園のクラスで唯一のベトナム人、そのお友達のお誕生日パーティーに招かれました。郊外の大きなお屋敷に着くと、ママが門のところでお出迎え。それを見たドライバーさんが、「あっ！」とビックリしています。尋ねてみると、有名な女優さんだとか。きれいでいつも笑顔のすてきな人だとは思っていましたが。家の中には大きく伸ばした彼女の写真が沢山飾られており、「なるほどね～」でした。（ベトナム）

「実家で女性のホームパーティーをするから」とお招きを受けて娘たちと伺いました。次々に到着してアバヤ(黒い上着)を脱ぐと、少々おしゃれして行っただけの私たちはちょっと気後れするくらい、髪を結い上げドレスアップした皆さんは華やかでとてもすてきでした。部屋の中は赤ちゃんからおばあさんまで女性だけで、男性は他の家で集まったりして食事をしているとか。アラビックコーヒーを何杯もお代わりしながら、おしゃべりをして、食事をいただいて、音楽をかけてダンスをして、深夜まで楽しみました。（サウジアラビア）

夫と共に中国人現地社員の結婚パーティーに出席した時のこと。日本と同じようにホテルのホールが会場で、雰囲気も似ているなあと感じたものの、用意していったご祝儀は、受付ではなく新郎のお母さんに手渡しするのです。ご両親がみんなの所を回ってご挨拶するので、その際「恭喜」(コンシー)と言ってご祝儀袋をお渡しすると、大きなハンドバッグを持っているお母さんは「謝謝」(シエシエ)と言ってバックを開け、たくさん入っている中にさらに押し込め、またパチンと閉めるんです。受付人員もいらないし、紛失のリスクもなく安心で合理的？新郎新婦もよく食べよく笑い、とても楽しいパーティーでした。（中国）

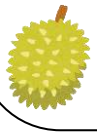
小さな子どもの Birthday Party には、クラス全員か学年の同性全員を招く(約 20 人)。プレゼントは一人ひとり持参。日本のようにみんなでお金を集めて何かを贈るということはしない。予算もそんなに高くはないから、そこそこなものが山のように集まってしまう。当の本人はラッピングをビリビリと破いて楽しそうなのだが、親は子どもが箱を開けてしまう前に欲しいものと要らないものを瞬時に分ける。当然全部欲しいと泣きわめくがなだめすかす。要らないものは再びきれいにラッピングして次の誰かの Birthday プレゼントに。日本にもそんな習慣あったような…。（アメリカ）

娘の小学校では、誕生日に友人を呼んでパーティーをする。親は毎回趣向を凝らして、Bouncy Castle をレンタルしたり、Disco Party や Slumber Party（パジャマ持参でお泊り）を開いたり、とにかく一大事だ。ある時、Farm Party に招かれた娘は、乗馬のことを考えナーバスに。私は「きっと楽しいよ、何でも挑戦だ！」と励ました。迎えた当日、勇気を出して乗馬した娘は、その途端にがっくり。馬の歩みと共に体をグラグラさせながら去って行った。やっぱりダメだったか…。「落ちるなよ～」と、その後ろ姿にそっと声をかけつつ大笑いした。（イギリス）

出産を控えて、5 週間の両親学級に参加しました。先生は男性たちの手のひらにアイスキューブをのせて「1 分間耐えなさい。お産の痛みはもっと強いと知ってね」と。心構えやマッサージなどを和やかな中にも真剣に学び、締めくくりは持ち寄りパーティー。アメリカ人 15 組みんながチョコレートブラウニーを持ってきたのにはビックリ。しっとり系、ふわふわ系、ナッツ入りやアイシングがけなど、バラエティ豊か。プレママの体重管理より心地良さを大切にするお国柄に甘えて、スイートなひとときを楽しみました。（アメリカ）

「サタデーナイトフィーバーってパーティーに招待されたけど、どうしよう」とある日友人に相談された。「やっぱり人差し指を上げるポーズじゃない」と一緒にポーズの練習をした。友人はパーティーに白いジャケットを着て、「イエーイ」とポーズしたら大ウケだったそうな。後日、友人のポーズは噂となり、「あれやって」と何人にもねだられて、大変に恥ずかしかったと。入れ知恵した私はほんの少しだけ罪悪感が。ちなみに他の参加者は赤いワンピースやジーンズにマフラーとかだったそうです。（イタリア）

街のあちこちでドリアンの匂いが漂ってくる時期にはドリアンパーティーというものが開かれていた。初めは、こんなまずいもの食べられない！と匂いを嗅ぐもの嫌だったが一年経つと、ドリアンパーティーを楽しみにしていた。ドリアンにアルコールはご法度ということでアルコールなしの変わったパーティーだったが、ドリアン好きになった私にはいい思い出だ。（マレーシア）



上皇・上皇后両陛下が、かつて英国をご訪問された際、日英関係団体共催のレセプションパーティーにご臨席くださいました。短時間のご滞在でしたが、上皇陛下からは参列者に向けたお言葉をいただきました。ご退場の際の美智子上皇后は歩を進めるごとに足を止め、いつまでも私たちに笑顔で手を振ってくださいました。それは SP に促されるまで続き、そのお姿は、今でも強く印象に残っています。（イギリス）

夫の取引先の方から招待された結婚披露パーティーに何度か参加した。新郎新婦の入場後、司会者の乾杯の音頭と共にひな壇に飾られている風船が針でパンパンパンと賑やかに割られ、宴はスタート。舞台上で誰かが挨拶をしたり、歌ったりするのを何となく聞きながら、円卓中央に運ばれる料理をいただく。お腹が満たされデザートの頃には、ひとりふたりと席を立ち、いつのまにかお開きとなる。ちなみに 100 人を超えるパーティーだが、テーブルの指定はないし普段着の人もいる。通りがかりの人が混ざっていても、きっと誰も気がつかない。（ベトナム）

海外の学校を紹介します

International School of Amsterdam

澤本　美樂

Foyer: 世界から集まる生徒や職員を迎える玄関ホール

アムステルダムという日本とは異なる文化や歴史に囲まれたオランダの街に位置する International School of Amsterdam(ISA)では日々様々な発見や経験、挑戦に出会うことができます。ISA では、国際色豊かな環境の中で生徒たちは新たな視点から知識や創造性を養い、グローバルな視野を広げることができます。私は ISA の 12 年生で、今 IBDP(International Baccalaureate Diploma Programme)という幅広い学問領域をカバーした高校生向けの国際的な学位プログラムを受講しています。このプログラムにおいて特徴的な要素として、Extended Essay(EE)と Theory of Knowledge(ToK)が挙げられます。EE では論文を通じて、独自の研究を行い、批判的思考やリサーチスキルを養うことができます。加えて、ToK という授業では、知識の本意や信頼性、異なる視点からの考え方を学び、自らの思考や前提と向き合い、EE と同様、批判的思考や自分の考えを表現する力を養うことができます。

IBDP Visual Art:
内なる声をアートで表現

また、IBDP を ISA で受ける上で特に刺激的な経験を得られるのは、この学校における多種多様な文化やバックグラウンドによるものだと私は思います。ISA では 60 以上の国や地域から約 1300 人の生徒や職員が在籍しています。そのため、幅広い文化や背景、思考を持つ人と関わる機会があります。これは授業においても、そのほかでも感じることができます。授業では、様々な文化や背景を持つ生徒たちとディスカッションやプレゼンテーション、ディベートやレクチャーという形でそれぞれの思考やアイディア、分析を交わすことができます。その結果、それぞれのユニークな視点や文化的観点から得られる情報や知識、または捉え方というものを学ぶことができ、より柔軟でグローバルな思考を育てることができます。故に、ISA における IBDP コースはとてもやりがいのあるプログラムであると思います。

High school girls soccer:
大会優勝の思い出

さらに、授業外での部活やボランティア活動などもたくさんあります。私は合唱部とシーズンスポーツのサッカー部に参加しました。そこでは同じ学年の友人のほかに、他の学年や学校の友人を作ることができ、また個人的にもコミュニケーションスキルや忍耐力といったスキルを養うこともできました。もっとも、こうして友人と好きなことを共に取り組めたことは、とても有意義で楽しい思い出です。また、自身や学校が企画するボランティア活動などの参加も可能です。私は、「てらこやジャパン」という日本にルーツのある子どもたちが日本語を学ぶ日曜学校へスタッフとして手伝いに行き、地震のことやいざという時の対処法を教えました。また、トルコの地震支援金を集めるために、日本語の古本を売ることもしました。これは友人と企画し行ったため、新たな学びにもなり、社会に貢献できた、とてもやりがいのある活動になりました。ISA はこういったボランティア活動や個人、またはグループによる企画をとても熱心にサポートしており、生徒たちの自立性や計画性、リーダーシップを成長させてくれます。

父の急な転勤でオランダに引越し、ISA に転校になったこと、最初は躊躇や不安ばかりでしたが、今になって後悔は一度もしたことがありません。このような、様々な刺激に溢れた有意義な学び場である ISA に通う機会が私に訪れたことを今では誇りに思っています。

教育相談　今むかし

1980～90 年代（設立当初）

当時はインターネットも一般的には普及していない時代。相談の方法は電話や FAX、または面談でした。メールという今では当たり前の方法も 2000 年以降の話です。出国する方への生活・教育情報は、航空会社や引越業者のセミナー、個人カウンセリングで提供しました。『帰国生への学校案内《関西》』の発刊と同時に NHK のテレビやラジオがお知らせを放送してくれたことで電話問い合わせが秋に増えたことも懐かしい思い出です。放送局、新聞、雑誌等マスコミのご協力も得て、少しずつ会の知名度も上がり会員数も増え、「帰国生の親の居場所」となった時代です。

出国前の方へは、その国の生活や教育の情報をお話ししました。時代や背景により千差万別、参考程度ですが、情報の無い時代ですから、海外で暮らした先輩として「不安を軽くする」という心のケアはできたのではないでしょうか。

帰国後の学校選択に関しては、帰国生の親としての経験をいかして、問い合わせに真摯に対応しました。1980 年代にはまだ少なかった帰国生受け入れ校（同志社国際など）が 1990 年代には飛躍的に多くなり、選択肢も増えました（千里国際や立命館宇治など）。『学校案内』を見た国内の祖父母からの電話を受けたこともありました。質問は主に 3 点。①我が子が受けられる学校はあるか？ ②海外では受験勉強をしていないがどんな準備をしたらよいか？ ③我が子の成績で受かるのか？未だ、海外における塾の進出が少ない時代の話です。

質問にはかけはし内で相談し多くの例を挙げて回答しました。ご本人に決定をゆだねる姿勢が大切だと思うのは、今もむかしも同じこと。お役に立てたのではと自負しております。（Y.M.）

2020 年代（現在）

子どもを帯同しての海外生活、親としての不安はかつても今も大きな差はないと感じます。母語の保持と習得言語の帰国後の維持は、帰国生にとっての永遠の課題です。寄せられる相談は、帰国のタイミングや中学高校受験に絡む学校選択が中心といえます。

出国前については現地の学校選択や母語をどう保持向上させるのかという相談がほとんどですが、近年は若い親世代が多いためか、ナーサリーやキンダーの入り方や友達の作り方、現地での習い事についての相談も受けます。一方、高校入学目前の学齢での出国が増え、インター校や現地のハイスクールの選び方や入学の仕方、入学後の勉強方法についての相談も多くなりました。帰国後の進路や帰国生のアドバンテージをいかした大学受験を見据えた海外生活を考えられていることを感じます。海外はもとより日本国内のインター校についての相談は多岐にわたり、IB 取得も合わせると関心の高さがうかがえます。精通している経験者がいない国については対応が難しいためお力になれないことも多く、ニーズとの乖離を感じることもあります。

帰国後、スムーズに日本の学校になじめず、不登校になったというようなお悩みもよく聞きますが、帰国生に配慮のある学校に編入学したお子さんは、アジャストできたケースが多いように感じます。在外中も帰国後もうまくアイデンティティを確立できず、自信を持てず、居場所をなかなか見つけることができないというお子さんも、実は少なくないのではないかと思います。また、帰国生の定義からは外れるご家庭からですが、親のどちらかが外国人なので学校選択に悩むという相談も散見されます。

インターネットであらゆる情報が検索可能な昨今ですが、誰に聞いたらいいのか、どうしたらいいのかわからないというケースもあります。グローバルやダイバーシティーという言葉もあちこちで見受けられますが、現状はすべての帰国生が心地よい学校生活を送れる教育環境にはまだ到達していないという印象です。悩みは様々ですが、「どうにかなるし、どうにかするためにこういう方法がある」という引き出しの提供に努め、どの引き出しを選ぶかを決めるのはご本人というスタンスで常にお答えしています。（Y.A.）

学校訪問記

帰国後の学校探しに困った母親たちが、手探りで情報を集めて本を発刊したのが始まりの学校情報誌『帰国生への学校案内《関西》』。40 年にわたって、近畿 2 府 4 県の小・中・高校、府県教育委員会を実際に訪問し、担当の先生のお話や在籍する帰国生、保護者の声をうかがってきました。帰国入試や英語入試制度を持つ学校だけでなく、会員の子どもが通って良かったと感じた学校など、帰国生の親の目線から注目したさまざまなタイプの学校を広くご紹介しています。制作にご協力くださったすべての皆さまにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

しかしここ数年、情報収集の手段が紙媒体からインターネットや SNS に移行してきたため、本誌は休刊とし、新たに学校訪問記をホームページおよびインスタグラムに載せることで学校を紹介する試みを始めました。こちらに紹介してある文章はほんの一部です。HP には写真も情報も学校案内より多くのものを載せてありますので、ご一読いただけるとありがたく思います。

高槻中学校・高等学校

＜　大阪府　　高槻市　＞

私立　共学　転編入

1940 年創立の伝統ある男子校が 2022 年に全学年で共学になりました。中 3 から 3 つのコースに分かれて探究学習を行い、難関大学を目指します。大阪医科薬科大学との高大連携プログラムのほか、「ケンブリッジ英語」による充実した英語教育が特色で、2022 年度からはアメリカの私立校と提携してデュアル・ディプロマ・プログラムが始まりました。最新鋭の設備を備えた新築校舎は大変美しく印象的です。英語選択型入試があり、受験する帰国生が毎年増えているそうです。大阪と京都の中間に位置して、最寄り駅には特急や新快速が停車するのでアクセスが良く、近畿一円から多くの生徒が通う人気校です。

2023 年 7 月訪問

この続きは HP でお読みください

奈良県立国際中学校・高等学校

＜　奈良県 奈良市　＞

公立　共学　帰国入試　転編入

2020 年 4 月に開校した学校です。国際バカロレア認定を目指し、開校 3 年後には IBMYP を取り入れた国際中学校を併設して、中高一貫校になりました。全クラスで IB 教育を行い、新学習指導要領で定める探究学習を実践されています。多くのネイティブ教員による語学教育のほか、プロジェクターやタブレットを活用したグループ学習など、充実した国際教育が魅力的です。

奈良、大阪、京都にまたがる関西文化学術研究都市に位置し、最寄り駅には大阪メトロ中央線も乗り入れてアクセスも良好です。県立校ながら、中学校の国際選抜(専願)では、保護者とともに居住し通学できる場合は県外からも出願でき、高校進学後もそのまま通学することができるというのは驚きです。

2023 年 7 月訪問

この続きは HP でお読みください

啓明学院中学校・高等学校

＜　兵庫県　神戸市　＞

私立　共学　帰国入試　海外入試　転編入　寮

啓明学院中学校・高等学校は2023年に100周年を迎えました。グラウンドには敷き直された人工芝が青々とし、新築された 100 周年記念館は、創立からの写真や資料の展示もあり、今までの学院の歩みをたどることができます。

啓明学院の特徴でもあるさまざまな体験活動ですが、活動することが難しかったコロナ禍も明け、新しいプログラムも企画されてさらにパワーアップしています。帰国生入試も以前のかたちに戻し 2023 年の 5 月には東南アジアでの説明会も再開することができました。帰国生優先の寮は全室個室で、トイレと洗面所も完備されており、親元から離れても安心して学生生活を送ることができます。

2023 年 10 月訪問

この続きは HP でお読みください

大阪国際中学校高等学校

＜　大阪府　守口市　＞

私立　共学　帰国入試　インターネット入試

大阪国際中学校高等学校を訪問しました。2022 年 4 月に、大阪国際滝井高等学校と大阪国際大和田中学校高等学校が発展的に統合し、男女共学の大阪国際中学校高等学校が開校しました。中学校・高等学校ともに、一人ひとりの目標に応じて複数のコースに分かれています。その中の国際バカロレアコース(高校)では、授業のほとんどを英語で学び、3 年間のプログラムを通して日本の高校卒業資格と IBDP 資格を同時に取得することが可能です。インターネット入試も実施されており、海外在住中でも受験ができるそうです。

校内は温かみのある木の温もりに包まれ、壁には先人の言葉が刻まれています。また、廊下の両脇には本がびっしりと並んでいます。子どもたちの知的探究心が大きく膨らみ、羽ばたいていく印象を受けました。

2023 年 10 月訪問

この続きは HP でお読みください

立命館宇治中学校・高等学校

＜　京都府　宇治市　＞

私立　共学　帰国入試　海外入試　転編入　寮

立命館宇治中学校・高等学校にうかがってきました。1995 年の創立以来、毎年数多くの帰国生を積極的に受け入れ、全校生徒の 2 割が帰国生です。コース別に独自のプログラムがあり、海外の現地校やインター校、日本人学校、いずれの出身者も、希望に応じた学びができるカリキュラムが整っています。

帰国生の特に多い高校 IB コースでは、本格的な IBDP プログラムにより、毎年高いスコアと IB ディプロマ取得率が続き、2023 年度卒業生は、ディプロマ取得率 100%という目覚ましい成績を挙げて、多くが海外のトップレベルの大学に進学されるそうです。総勢 40 名というネイティブ教員の数からも、学校全体で高度な国際教育が行われていることを感じます。校舎やグラウンドは広々としていて、開放的なラウンジでは生徒さんたちが楽しそうにくつろいでいるようすが印象的でした。

2023 年 12 月訪問

この続きは HP でお読みください

「関西帰国生親の会かけはし」と他の団体とのつながり

講師派遣　海外に赴任される先生方や企業の駐在員のご家族に向けて会員の経験をお伝えしています。

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会セミナー（2024 年 2 月 17 日）

「在外派遣を考える～保護者・配偶者の立場から～」

企業海外渡航前セミナー（オンライン開催　2024 年 2 月 22 日）

渡航前個別相談会（対面＆オンライン開催　通年）

寄稿　会員の経験談や在外会員の現地のリポートを掲載しています。

『月刊グローバル経営』㈳日本在外企業協会 2023 年 5 月号「住まなければ見えなかったアメリカ」

『月刊グローバル経営』㈳日本在外企業協会 2023 年 6 月号「サステナブルなメルヘン」

『月刊グローバル経営』㈳日本在外企業協会 2024 年 3 月号「ドイツのお茶とうつわの話」

資料参加

（公財）海外子女教育振興財団「帰国生のための学校説明会・相談会」（オンライン及び名古屋会場にて開催）

「レッツトーク 2023 秋」実施報告

2023 年 10 月 19 日に秋のレッツトークを大阪で開催しました。最初はぎこちなかったみなさまが少しずつ打ち解けてくると、出るわ出るわ質問の数々。私たちも昔こんな気持ちで海外に赴任し、そして帰国してきたな、と懐かしく思いながら時間を忘れて楽しくお話をさせていただきました。

2023 年 10 月 19 日　大阪にて開催
＊写真はプライバシー保護のため画像処理をしています。

インターネットで簡単に情報を集められる時代ですが、顔を合わせてコミュニケーションを取ることの重要性をあらためて感じました。さっそく仲良くなられた方々が連絡先を交換し合って、明るい表情で帰っていかれるのをお見送りしながら、このような活動はこれからも続けていきたいな、と思いました。ご参加くださいましたみなさま、ありがとうございました。また次回、お会いしましょう。

会員のつぶやき

今回はかけはしの活動や会報作成にまつわる思い出などについてつぶやいてみました。写真とともにお楽しみください。

かけはしリポートを担当してハヤ 28 回。多くの方々にアンケートでお世話になりました。ありがとうございました。そろそろネタが切れて苦しい。（ままったり）

学校情報が欲しいとかけはしに入会。その後は、誰かのお役にたてるならと継続。各作業での生みの苦しみを乗り越えられたのは、仲間との協力や達成感の心地よさかな。すべての経験に感謝！（スカビオサ）

元々パソコン作業は苦手ではなかったけれど、会報に携わり、色々な技を知ることができました。これもかけはしとの出会いのおかげです。（マッキー）

会員が住んだ地域を示す世界地図

以前の『学校案内』と会報

夫の単身海外駐在により、11 回目の引越しをする。引越しの度に、アルバムを開いて思い出を振り返る。あの頃は若かったな～。子ども達、可愛かったなぁ。(Ruby)

最後の駐在から帰国して 10 年余り、今度は娘の彼の駐在が決まったとか。時の流れを感じながら、私から贈る言葉は「大丈夫、なんとかなるよ～!」。こんなことを言えるのもかけはしのおかげです。(ジャカランタ)

「人と人、海外と日本を結ぶかけはしになりたい」という願いを込めた『学校案内』の表紙デザインは今も変わらず

かけはしに入ったのは 20 年くらい前のこと。40 代、ツルツルスベスベ肌の若かりし頃。ということは私、今、いったいいくつになったんだろ。あー恐ろしや！(Kuppy)

会報の「ドッキリ！」や「つぶやき」を読むのが毎回楽しみ。日頃はすっかり忘却の彼方なのに「そうそう！そんなこともあったよね～」と当時のことを鮮明に思い出す。(だー子)

会報 40 号から
カラー印刷になりました

『学校案内』の取材で学校訪問し、名刺を持っていなかった私が「かけはしの〇〇です」と名刺を差し出し、親目線の質問をし…。緊張したけれど懐かしい思い出です。(ばあばママ)

海外や日本での子育て、その時その時でとことん悩み考えて最善の策を取ってきたつもり。いつも傍らにいてくれたかけはしの仲間と『学校案内』に感謝！(すみれっ子)

かけはしセミナー

最初の米国駐在から約 20 年。帰国後にかけはしの活動を通じて改めて知った、現地での我が子たちの頑張り。あなた達がいてくれたから、私も頑張れたんだね。(アルト)

2013 年ボランティア賞を
いただきました

子どもの学校探しをきっかけに入ったけれど、今は母の拠り所。チームで作る作業を積み重ねてメンバーの日本語力の高さや支え合う大切さを実感。近頃頼りすぎて申し訳ない。(トホホの母)

今は社会人の娘の人生は、中学での帰国時の学校選びで変わった。自分で決めた学校だったが、かけはしに相談して、安心して受験させることができたことをきっかけに私がかけはし入会。私の居場所ともなったかけはしに感謝。(アルカマル)

帰国後、家族がそれぞれの世界を持つそばで迷子気分になりかけはしへ。色々な在外・帰国経験に刺激を受け、学校訪問やセミナーで先生方の熱意に触れて。今も学びの連続です。(梅)

編集後記

会報 1 号(1997 年 3 月)の巻頭記事は教育研究者による「海外子女教育への提言」でした。帰国生座談会や保護者の経験談のページ、「キルトを教えます」という案内もあり、先輩たちの「学びたい、気持ちを分かち合いたい、会員が体験をいかせる場を作りたい」という願いを感じます。23 号から広報部(現会報チーム)が担当し、リポートや異文化体験集、海外の学校紹介なども企画。会員だけでなく子どもや友人の協力も得て、さまざまな思いをお伝えできるのがうれしいです。読んでくださった方々のお声が励みになります。

かけはしならではの発信に努め、このたび発足 40 周年記念号となる会報 50 号をお届けできますこと、感謝の思いでいっぱいです。本号へのご意見やご感想をぜひお聞かせください。

《ホームページ、インスタグラム　情報発信中》

Instagram

昨年大幅にリニューアルしたホームページ、インスタグラムにて情報発信をしています。ぜひご覧ください。
また海外生活情報を含めた投稿も随時募集しています。

笹井　さゆり

ご賛助くださっているみなさま　（敬称略、順不同）

パナソニック株式会社　　川崎重工業株式会社　　樟蔭中学校・高等学校
啓明学院中学校・高等学校　　高槻中学校・高等学校　　関西大倉中学校・高等学校
早稲田摂陵中学校・高等学校　　大阪国際中学校高等学校
樋口正和（小林聖心女子学院中学校・高等学校教頭）　　辻本久夫（関西学院大学非常勤講師）
匿名（団体）　　匿名（個人）

♪かけはし会員募集中♪

＜関西帰国生親の会かけはし編＞
Email: kakehashi@kansai.email.ne.jp　　URL: https://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/
copyright © 2024 関西帰国生親の会かけはし　All Rights Reserved

homepage